

擬人劇『プラボーダ・チャンドローダヤ』 (悟りの月の出) 第二幕の試訳

平岡昇修

prabodhacandrodaya は *kṛṣṇamīśra* により作成された六幕よりなる寓話劇である。文学的背景を *mahābhārata* に踏まえ作者の哲学 *vaiṣṇava vedānta* を作品に組み込み *puruṣa* と *brahman* と *viṣṇu* を同一視する一元論を説く一方、解脱への助言として *viṣṇubhakti* を登場させ *viṣṇu* 派的色彩を打ち出す。

○登場人物

プロローグの登場人物

座頭 (*sūtradhāra*)

女優 (*naṭī*) 座頭の妻

劇の登場人物

世界の指導者である純粹精神 (*puruṣa*) と、人間を迷わす原因である幻影 (*māyā*・*puruṣa* の妻) の間に、心 (*manas*) が生まれた。心と活動 (*pravṛtti*) との間には、大王である強大なる迷妄 (*mahāmoha*) が生まれ、心と無活動 (*nivṛtti*) との間に分別 (*viveka*) が生まれ、両者はこの劇で敵対関係を演じることになる。決意 (*saṃkalpa*) は心の援助者となる。

○大王、強大なる迷妄の配下

愛 (*kāma*) と貪欲 (*lobha*) と怒り (*krodha*) たちは、大王の軍隊指揮官。
* 快樂 (*rati*) は愛の妻であり、* 渴愛 (*tṛṣṇā*) は貪欲の妻であり、* 暴力 (*himsā*) は怒りの妻である。自我意識 (*ahaṃkāra*) は心の長男である。欺瞞 (*dambha*) は、貪欲と渴愛の息子で、自我意識の孫で、虚偽の父親である。若者 (*baṭu*) は、欺瞞の弟子。唯物論者 (*cārvāka*) は大王の親友。* 弟子 (*śiṣya*) は唯物論者の弟子。* 邪見 (*mithyādr̥ṣṭi*) は大王のお気に入りの娼婦。* 錯謬 (*vibhramāvatī*) は邪見の腹心の友。* ジャイナ教裸行派の教理 (*digambarasiddhānta*) は、* 托鉢の苦行者 (*kṣāpanaka*) の行動の中に現われる。仏教教理 (*buddhāgama*) は托鉢僧 (*bhikṣu*) の行動に現われる。ウマー神の教理 (*soma siddhānta*) はカーパーリカ (*kāpālīka*) の行動に現われる。門衛 (*dauvārika*)。* 人間 (*puruṣa*) が登場する。* の人物はプラークリット語で話す。

○大王、分別の配下

* 思慮 (*matī*) は大王の愛する妻。ウパニシャッド (*upaniṣad*) は長く離別

の状態にあった妻。信仰 (śraddhā) はウパニシャッドの付き添い人。* 友情 (maitrī) は信仰の腹心の友。寂靜 (śānti) は信仰の娘。* 同情 (karunā) は寂靜の付き添い人。真理の探求 (vastuvicāra) と忍耐 (kṣamā) と満足 (saṃtoṣa) たちは、大王の軍隊指揮官。ヴィヤーサの言葉 (vaiyāsikī sarasvatī) はヴィシュヌへの信愛の使者。離欲 (vairāgya) は心の娘。黙想 (nididhyāsana) は、ヴィシュヌへの信愛の援助者。悟りの出現 (prabodhodaya) は、ウパニシャッドと分別の結婚によって、知識 (vidyā) という娘と同時に生まれる息子。ヴィシュヌへの信愛 (viṣṇubhakti) は、分別の側の守護神。他に* 門の看守 (pratīhārī)。人間 (puruṣa) は、この立場ではサンスクリット語で話す。王の従僕 (pāripārśvaka) 王の御者 (sārathi sūta) がいる。* はブラークリット語で話し、* 印以外の登場人物はサンスクリット語で話す。

○場所

一幕…明白でない。

二幕…ベナレスで、先ず初めは、欺瞞の住まい。次には強大なる迷妄の宮殿。

三幕…異端者のところ。

四幕…初めに、ラーダー地方の聖地 (tīrtha) にて、次に、ベナレスへ向かう道、最後に、ベナレスでのヴィシュヌ寺院の中で。

五幕…聖地より遠く離れた巡礼地 (tīrtha) と戦場。

六幕…純粹精神の宮殿にて。

○第二幕までのあらすじ

プロローグにおいて座頭と女優との会話によって劇は始まる。強大なる迷妄の配下である愛と快樂が登場し、彼らの会話によって観客に場面の説明がなされる。幻影と結びついた純粹精神には一人息子の心がある。心は、二人の息子である分別と強大なる迷妄を生む。このことにより僧惡の対立する二つの家系が生まれる。強大なる迷妄より現われた家族は、ほとんど全世界を服従させた。それに反して、分別と彼の同朋たちは、滅亡の近づいたことを知り領土の削減を悟る。愛はこのことを誇るが、一抹の不安が愛を悩ます。というのは一人の年老いた預言者が、心の子孫の中に知識と名づけられる娘が生まれ、彼女は、すべての親類、縁者を破滅に導くと予言する。悟りと名づけられる息子は、知識と同時に生まれ、この双子はウパニシャッドと分別が合一する時に生まれるといわれる。それを聞いた愛と快樂は驚くのである。

彼らが退場した後、分別と思慮が登場する。幻影によって無知の眠りに沈められた純粹精神は心の企てを味わう。心は、自我意識と結びつき『私』『これは私のもの』と叫び、自我のとりこになってしまう、そのため、一層、純粹精神は、自らの真の姿を見失ってしまう。しかし希望はある。悟りの誕生である。分別は妻である思慮のねたみをおもんばかりが、思慮は理解ある態度で予言者の述べた救いの仲介によって分別にウパニシャッドとの合一をすすめる。そこで分別は彼の同朋を集め、これからの対策を練るのである。第二幕では、強大なる迷妄は、悟りの生誕を思い、敵のとり策を知って、悟りの出現に最適の地であるベナレスを確保するために欺瞞を差し向けるのである。欺瞞が登場し第二幕が始まる。

二幕〈欺瞞が登場〉

欺瞞 (dambha) ①私の大王である強大なる迷妄 (mahāmoha) さまによって命ぜられた。『わが息子よ！大臣どもと一緒にいる分別 (viveka) が悟りの誕生 (prabodhodaya) を約束した。平静 (śama) と自制 (dama) たちが、所々の聖地へ派遣された。このことは、わが家族の滅亡に近づいたことである。それゆえ、あなた (欺瞞) は慎重に (彼らを) 排除すべきである。この世で最高の解脱を得る場所は、ベナレスと名づけられた町である。②それゆえ、汝は、そこに行き、四期の隠棲期に於ける救済を防げることに心がけねばならぬ』と。今、ベナレスの大部分は、私の支配下にある。実に今、私の支配下にあるので、私は、御主人 (強大なる迷妄) におうせつかった使命を果そう。

輝ける月の夜には、娼婦の館にて酒気をおびた女の口うつしの酒を味わい、とめどない性の喜びを味わって時を過ごし、
昼には、すべてを知る者として、浄化の儀式を執り行う者として、
長期のアグニ祭官として、ブラフマンを知る者として、苦行者として、
よそおう詐欺師により、この世は、あざむかれている。(1)

〔周囲を見やりながら〕

バーギーラティー (ガンジス) 河を渡って来たこの旅人は誰だろう。
今、こちらに向かって来る。この者は、次のように云われている。

（あの旅人は）高慢さに燃えている者のような、三界をなめつくした者のような、
多言の弁舌によりののしる者のような、知をもって嘲笑する者のようなものである。（2）

おそらく、この者は、南のラーダー地方より来たにちがいないと私は思う。
この誇り高い自我意識（ahamkāra）の行状を私は思い出すであろう。（と言って、帰って行く。）

〔そこで、先に述べられたような自我意識が登場する。〕

自我意識 ああ、なんとこの世は、愚か者ばかりなのだろう。というのは、

実に、彼らは、師（prabhākara）③の考えを聞くこともなく、クマーリラ（kaumārila）の哲学もシャーリカ（sārika）④の言葉の真の意味も、ヴァーチャスパティ（vācaspati）が何を語ったのかも知らなかった。マホーダディ（mahodadhi）⑤の名言も理解することもなく、マハーヴラタ（mahāvraata）⑥の信奉者のことも考えなかった。真理への詳細な探求は、自分を信じきっている愚か者どもにとっては、どうということでもないのだ。（3）

〔周囲を見やりながら〕

この者どもは、（ヴェーダの）意味を良く理解することなく自分勝手に、ただ唱えることだけに専念し、ヴェーダの意味を取り違える者たちなのだ。

〔他の方向を見やりながら〕

この者どもは、ただ施物のみを得、出家僧としての生活を行ない剃髪をし、自ら学者だと思いこみ、ヴェーダーンタの教理を乱すのだ。

〔どっと吹き出し笑いをして〕

ヴェーダーンタが、聖典であるなら、直接知覚たちによって得られた正しい観念に矛盾することを教える仏教徒たちは、誤りだらけを教えている。（4）

この者ども（仏教徒たち）の言葉だけを聞くなら、とんでもないあやまちをおかすであろう。

〔別の方に行って〕

この者どもは、シヴァ派（śaiva）やパーシュパタ（pāśupata）派の者どもであり、アクシャパーダ（akṣapāda）の教義を不当に立てる者どもであり、畜生どもであり、異教徒どもなのだ。彼らと口をきくだけで人々は地獄に落ちてしまう。この者どもの（教義）は、哲学の道より遥かに離れており、避けるべき存在なのである。

〔別の方に行って〕

そして、この者どもは、

ガンジス河の岸辺で、さざ波によって冷やされた岩の上に敷かれた、すばらしい草で編まれた敷物の上に座し、ひとつかみのクシャ草で荘厳された大きな杖と、ぴかぴかの水瓶を持ち、規則正しく連なる数珠の一つ一つの玉をくることに指先を集中させ、金持ちより富を奪い去る。ああ、偽善者よ！（５）

〔再び、他の方へ行き〕 この者どもは、三条の杖を口実にして自分たちの存在性を誇示し、同様に、二元論、不二論の道はずれたものどもである。〔他の方に行って見ます〕 おや、これは、誰の住まいであろう。門の端に建てられた非常に長い竹竿の上には、良く洗濯された、たくさんの白い布がはためき。ここかしこに、黒鹿の皮、ひきうす、祠薪、供犠の柱の頭冠、木製の臼、杵が、ならべられ、絶えまなく続けられる祭火にくべられた献供の牛酪の臭いと煙により、周辺の空は黒く染まっている。一群の住まいが神々の河（ガンジス河）からあまり遠くない所に見える。まちがいなく、これは、家庭供犠を遂行しているだれかの家に他ならない。じゃ、ここを我々の聖地として二・三日の逗留しよう。〔登場の時のような身振りで見やる。〕 おや、

額・腕・腹・胸・首・唇・背中・顎・腿・頬・膝を泥でぬりたくる、頭頂の髪先端・耳・腰・手に輝けるダルバの新芽を付けているこの者は、あたかも生まれかわった欺瞞のように思える。（６）

よろしい。彼のところへ行こう。〔近くに行く〕 汝に幸あれ！〔欺瞞はフンと云って彼を避ける〕

〔そこで若者が入場する〕

若者 (baṭu) 〔急いで〕バラモン様！遠くでお泊りください。というのは、この住まいには足を洗って入らなければなりません。

自我意識 〔怒って〕おお、罪深き者よ！

ツルシュカ（イスラムの地、たぶんトルコ）の地に我々が行った時、学識あるバラモンの来客たちに、座する椅子や足洗いの水等で家長たちは敬意を示さなかった。（ここのようだ）

欺瞞 〔手振でなだめる〕

若者 遠方より来られた気高き方の家族や性格等について少しも私どもは知らないとい私の主人は言っております。

自我意識 ああ何と！我々の家族や性格などさえも今、しらべ上げられねばならないのか！では聞きなさい。

ガウダは比類ない王国であり、そこには、すばらしい町ラーダーがあり、ブーリシュレーシュティカ^⑦となづけられる非常に美しい所がある。そこで私の父は非常にすぐれた人であり、その息子たちをこの世で知らない者はだれもいない。彼らの中で、知性や性格や分別力や勇気や慎ましさと宗教義務の遂行に関しては、私が最もすぐれているのだ。（7）

欺瞞 〔若者を見る〕

若者 〔銅の水差しを取り上げて〕尊き方よ！どうぞおみ足をお洗ってください。

自我意識 〔ひとりごと〕わかった。これについて何らの反対もない。そうしよう。〔そのようにして近づく〕

欺瞞 〔齒を喰いしばり、若者を見やる〕

若者 あちらにお行きください。風が吹いて、（あなたの）汗の飛沫が飛び散りますから。

自我意識 ああ、これはすばらしいバラモン主義だ。

若者 バラモン様、本当ですか。というのは、

彼（欺瞞）の足に触れない大地の王たちは、地面を、王冠の宝石の光によって照らすのです。（8）

自我意識 〔ひとりごと〕 ああ、ここは、欺瞞によって専有された土地なのだ。

〔大声で〕 わかった。この席にすわろう。〔そのように彼はする〕

若者 すわってはいけません。だれも、気高き人の席にすわってはいけません。

自我意識 ああ、罪深き者よ！ラーダーの南の地方で名声を得ている清浄なる私たちでさえこの席につけないのか。じゃ、聞きなさい。おろか者よ！私たちの母は、名家の生れではないが、私は、良くヴェーダに精通した家の或る女性と結婚した。そうだから、父より私の方がすぐれているのだ。私の妻の兄弟の甥の娘は、この者との血のつながりの故に、間違って罪を着せられているのだ。だから私を愛してくれる妻さえとも別れたのだ。(9)

欺瞞 バラモン様、もしそうなら、あなた様は、私たちの家系のことを御存じではないでしょう。というのは、

私は、かつて蓮より生まれたおかた（梵天）のところへ到着いたしました。即座に偉大なる賢者たちは席から離れ、梵天は牛糞をといた水によって清められた彼自身の腿の上にすぐさま私をすわらせ私を導きました。(10)

自我意識 〔ひとりごと〕 — おお、傲慢なバラモンの誇張だ。〔考えた後〕 たぶん、欺瞞そのもののようだ。そうにちがいない。〔大声で〕 なぜ、おまえはそんなにいばっているのだ！〔怒って〕

ああ、誰がヴァスの主人（インドラ）か？言ってみろ、誰が蓮より生まれたもの（梵天）か。この世で聖者たちの生まれた場所は、どこかも、言え。私の苦行の強さを知れ。百人のインドラと百人のバラモン、あるいは百人の聖者どもを打ち負かそう。(11)

欺瞞 〔喜びの目で見ると〕 うん、この方は気高き私のおじいさんの自我意識にちがいない。気高き方よ！私は、貪欲（lobha）の息子、欺瞞なのです。あなた様を尊敬いたします。

自我意識 私の息子よ！汝に長命あれ！ドヴァーパラ年代の終りに、おまえが、子供であったのを私は見た。今、長い期間の別離と老年のために良く思い出せないが、おまえの息子、虚偽（anṛta）は元気か？

欺瞞 元気ですとも、強大なる迷妄さまの命令によって、ここ（ベナレス）におります。彼（息子）なしには、一時なりとも私は生きてはいけません。

自我意識 じゃ、おまえの母である渴愛 (trṣṇā) と父である貪欲 (lobha) も元気か？

欺瞞 二人とも、大王である強大なる迷妄さまの命令でここにおります。二人なくしては一瞬たりとも生きてはおられませぬ。しかし、どのような目的のためにここでは、あなたさまの名誉となるのでしょうか。

自我意識 息子よ！私は、強大なる迷妄に対して分別 (viveka) によってもたらされる危機について私は聞いた。その事を確かめるために私は来たのだ。

欺瞞 よく来られました。というのは大王である強大なる迷妄さまも、インドラ界より、ここに来られるとお聞きしております。神によって、ベナレスと名づけられ町を（強大なる迷妄さまが）首都として選ばれたとのうわさがあります。

自我意識 しかし、なぜ、完全で強大なる迷妄さまが、ベナレスに身を落着けられるというのだ。

欺瞞 気高きお方さま！分別を阻止されるおつもりではないのでしょうか。実は、

不死なるブラフマンの町、ベナレスは知 (vidyā) と悟りの出現 (prabodhodaya) の生まれた地であり。（私たちの）家族を滅ぼそうとたくらんでいる彼（分別）は、ここに永久に定住しようとしているのです。（12）

自我意識 「恐怖をもって」もし（強大なる迷妄が）そのようなことをするなら、この（迷妄の）目的である阻止は不可能になるであろう。というのは、

最高なるものの地（ブラフマン自身）を知らないものどもに、憐みの心をもつ三つの都市の破壊者（シヴァ）がこの世を滅する時に、この世の恐怖心をかきたてる救世主たる悟りをここに出現させる。（13）

欺瞞 事実、そうかもしれません。でも、これは欲望 (kāma) や怒り (krodha) 等に征服されたものたちにとっては、不可能なことです。

両手と両足と心をきたえ知をもち苦行をし、聖地巡拝を行なうものは聖なる地で（解脱）の果報を得るのです。（14）

〔幕の内側で〕 さあ、皆さん、今ここに神聖なる迷妄さまが御到着なさいます。

白檀の粉によってぬりこめられ水晶と宝石でできた中庭を飾ってください。
水門を開いてください。家のまわりの水路いっばいに流してください。多
くの輝ける大きい宝石のついたアーチの列を、各所に、建ててください。
宮殿の頂上にインドラの弓の輝きをもつさまざまな色彩の旗をたなびかせ
てください。(15)

欺瞞 気高き方よ！この大王さまがすぐ近くに來られました。この方の出迎
えによって敬意をおはらいください。

自我意識 そうしよう。〔退場する〕

——〔序 praveśaka の終り⑧〕——

〔強大なる迷妄と付き人が気取って入場する〕

強大なる迷妄 〔笑いながら〕おお、放縦な愚か者たちよ！

肉体と区別されるアートマンがある。それは他の世界に渡り、果報（業）
の享受者である。この希望とは、（信心という）大きい天空の木より生じ
た花の甘い果実より生じたもののようである。(16)

自分自身の想像で生み出した、対象を受けいれる愚か者どもによってこの
世は、だまされているのだ。

実に存在しないもの（肉体と異なるアートマン）が存在すると、いつわっ
て語る多くのおしゃべりなアースティカ（āstika）（「肉体と靈魂の間に区別
が存在する」と主張する人々）たちは、真実を語るナースティカ（nāstika）（「肉
体と靈魂の間に区別が存在しない」と主張する人々）たちを非難する。じゃ、
真実を確かめてみなさい。この肉体が減びた後に輪廻によって生じた結果
としての靈魂（citi）を（肉体と）異なった靈魂（jīva）とだれも見なしは
しない。(17)

この者たちは世界だけでなく自分たち自身さえもいつわっている。実に。

口等の部分に関しては、人間は皆、同じ肉体であるのに、どうしてカーストの違いがあるのだ。この女性と財産は、自分のものなのか他人のものなのかというその区別を我々は持たない。暴力、女性との自由な交渉、他人のものの専有に関して、このものたちは、度胸なく、しょうか、しまいか、と考えあぐねているのだ。(18)

〔考えた末、自慢たらしく〕あらゆる点でローカーヤタ（世間に従属せる人）こそがシャーストラ（聖典）である。それによると、知覚手段（pratyakṣa）こそが認識根拠（pramāṇa）であり、真の實在（tattva）は、地・水・火・風である。人生の目標（puruṣārtha）は、富（artha）と愛（kāma）である。（地水火風の）元素（bhūta）のみを思考するのだ。だからこれ以外に（聖典）はない。死こそが最高の極地である。我々の考えを採用しヴァーチャスパティーが作成し唯物論者（cārvāka）に伝えた。彼（唯物論者）によって弟子や孫弟子を介して世界中にこの教義を拡めた。

〔その時、唯物論者とその弟子が登場する〕

唯物論者 かわいいやつよ！おまえは、実に政治に関して知識をもっている。そこには経済も含まれている。三つの（ヴェーダ）は、うそつきのたわごとにすぎない。見なさい。

たとえ司祭者がいなくなり、祭式が終了し供物が破壊されたとしても供犠で天国を得るというなら、森の火災によって焼けた木々でも、多くの実をつけるというのか。(19)

続けて、

供犠において生贄に供された動物が天国に行くはずであるなら、一体全体供犠者はなぜ自分の父親を生贄として殺さないのか。(20)

また、

死者にささげる供犠（祖霊祭 śrāddha）が死者を満腹させるのであれば、

油は、消えてしまった燈明の炎を再生するというのか。⑨ (21)

*** 弟子** 先生！実に人間の最高目標が食べることと飲酒であるなら。なぜ苦行者は、輪廻の世界（この世）の喜びを捨て去り、ものすごい苦痛に自らをおき、十二日間の断食（parāka、マヌ法、11216）と、一日目は、牛の尿、牛糞、牛乳、酸乳、蘇油及びクシャ草の煎汁にて生活し、二日目は断食するという二日間の苦行（sāntapana、マヌ法、11213）一ヶ月中、三日に一度夕刻にのみ食するという断食（śaṣṭhakalopavasa、マヌ法、11201）や他の苦行に身を投ずるのですか。

唯物論者 ばか者どもによって作成された聖典（āgama）によってだまされている愚か者どもにとって、この満足感は、希望という甘さによっているのである。よく見てみる。

両腕で強くつかまれた胸の部分にそそり立つ乳房をもつ大きな目をした女性の魅惑的な抱擁と、托鉢をし断食をし苦行をし太陽の炎にさらして肉体をやせ衰えさす気狂いどもとは、これほど大きなへだたりがあるのか。(22)

*** 弟子** 先生！苦のまざりあった輪廻の世界（この世）の喜びは捨てねばならないと苦行者たちは申しております。

唯物論者 〔大声で笑い〕これは、畜生のごとき人間どもの下らない戯言なのだ。

感じさせるものとの接触によって生じる人間どもの喜びは、苦を増すものであるが故に、捨て去るべきであるというのが、ばか者どもの理論である。ほら、他のものに喜びを求めようとするものは、靱殻でおおわれているから、豊富で非常においしい白い米を捨てようとするのだ。という理由で。(23)

強大なる迷妄 ああ、実に久しぶりに確信のもてる言葉を聞いて、嬉しさが込みあげて来た。〔喜びをもって見まわす〕おお、（そこにいるのは）私のかわいい唯物論者ではないか。

唯物論者 〔ふり向いて〕これは、大いなる王、迷妄様。〔近づき〕大王に勝利あれ！ここにおります唯物論者が、つつしんで敬意を表し上げます。

強大なる迷妄 唯物論者よ、元気にしておるか！ここに、すわりたまえ。

唯物論者 [すわる]これはカリ期（のうまれかわりとしての私）が八体（額・胸・両手・両膝・両足）投地をしているのです。

強大なる迷妄 おお、カリ期（のうまれかわり）よ！幸運がなくなるということはないのだ。

唯物論者 王様の御加護により、すべてが、うまく行きますように！任務を成し遂げた者は、王様のおみ足にひざまずくことを望んでおります。というの、

敵を倒すという重要な命令を受け取り、それを成し遂げ、即座に幸福と喜びを得、非常なる幸福感で満たされた顔を見るものは讚美し、王の蓮の花の如き足もとにひざまずく。(24)

強大なる迷妄 このカリ期において、どれだけ、成し遂げられたのか？

唯物論者 王様！

ヴェーダによって定められた道を捨て去り、大衆は自分の意志のままに行動し、強大なものによって導かれている。この（心の変化の）源は、カリ期によっているのでも、私によっているのでもない。それは、実に大王の強き力の行使こそが起こすのである。(25)

北方（カシミール等）、西方（シンドゥ等）の住人は、三ヴェーダを捨て去った。平静（śama）、自制（dama）等の話しは何になるのだ？また他の場所でも、三ヴェーダは、一般に、生活規範としてのみ、役立っているにすぎない。次のように師（br̥haspati）がおっしゃる。

祭火を燃やし、三ヴェーダを誦し、三つの杖を持ち、灰を身体に塗りたくることは、知恵と勇気を欠く者たちの生活規範であると、ブリハस्पティは述べる。(26)

たとえ夢で（聖地）クルクシェートラ等の地において、知識と悟りの誕生が起ころうとも、あなたさまにとっては、恐れにたることではございません。

強大なる迷妄 よくやった！この聖地が、無価値なものになったことは、実

に偉大なことだ。

唯物論者 王様！その他にもお知らせがございます。

強大なる迷妄 それは何だ？

唯物論者 ヴィシュヌへの信愛 (viṣṇubhakti) と申す偉大な力をもつ苦行女がおります。しかし、たとえ彼女の行動がカリ期によって縮小されたといえども、我々は、守護するものたちを見ることができないのです。だから、あなたさまは、それに用心なさらなければなりません。

強大なる迷妄 〔ひとりで恐れる〕ああ！その苦行女は偉大な力の持ち主であると知られている。彼女は生来の敵であり、私にとって追い払うことは容易ではない。だからこうしよう。〔ひとりごと〕ときには、過度の行動も取らなければなるまい。〔大声で〕でも、友よ！この女は、恐れるにたりん！愛 (kāma) や怒り (krodha) たちが敵であるかぎり、この女は、どこに現われるというのだろう。

唯物論者 だが、どんなに小さな敵でも、勝利を望む者は、おろそかにすべきではありません。というのは、

たとえ細い新芽であろうと刺のささった足は、苦痛にさいなまれる。そのように、恐怖にかられた末には、小さな敵であろうとも、王様の苦痛の種となりましょう。(27)

強大なる迷妄 〔幕の内側を見て〕おい！誰だ！そこにいるのは誰だ！

〔門衛 (dauvārika) 登場〕

門衛 勝利、勝利あれ！王さま御命令を！

強大なる迷妄 おお！悪人仲間よ！愛と怒りと貪欲と高慢 (mada) と嫉妬 (mātsarya) たちに命じなさい。『ヴィシュヌへの信愛という苦行女を、あなたたちは慎重さをもって、阻止すべきである。』と、

門衛 御命令どおりにいたします。王様！

〔(門衛が) 退場〕

〔手紙を手にならずさえて一人の人間が登場〕

* **人間** (puruṣa) (プラークリット語にて語る) 私は、ウトカラ (utkala) ⑩地方より参ったものです。そこの海岸には、最高なるプルショータマ (puruṣottama) と名づけられた寺院⑪がございます。私は、そこにおられる高慢と自負 (mana) のお二人の御主人さまによって大王様のもとへ差し

向けられました。〔見まわし〕ここは、ベナレスだ。これは、王様の宮殿だ。よし、はいろう。〔はいる〕ここに、唯物論者と一緒に何やら話しておられる王様が、おられる。あの方の近くにまいろう。〔近づいて〕勝利よ、王様に勝利あれ！王様！思慮してこの手紙をごらんください。〔と言って手紙を差し出す〕

強大なる迷妄 〔手紙を受け取り〕あなたは、どこから来たのか？

* 人間 私は、プルショータマより参りました。

強大なる迷妄 〔ひとりごと〕困った事があったにちがいない。〔大声で〕唯物論者！行きなさい！なすべきことに関して、あなたは、注意深くあらねばならない。

唯物論者 王様の御命令のままにいたします。〔退場〕

強大なる迷妄 〔手紙を読んで〕〔手紙の内容〕『幸あれ！プルショータマ寺院より、聖地ベナレスにおらる王の中の王、最高自在神なる強大なる迷妄様、おみ足に、八体投地の礼拝をして高慢と自負は、お知らせすることがございます。と申しますのは、(敵たちは) うまく行っているようなのです。さらにまた、女神寂靜(やすらぎ) (śānti) は、寂靜の母なる信仰 (śraddhā) と共に、分別の使者として昼夜をかけて分別との和解(融合)を王妃ウパニシャッドに説得しております。その上、愛の仲間の正しい法 (dharma) までも離欲どもによって籠絡されているように思えるのでございます。と申しますのは、愛と別れて、密かにどこかをさまよっているのです。このことをお知りになられて、王様は、正しい観念をおもちになられました。』〔怒って〕ああ、何故寂靜ほどのものに、この二人のばかものどもは、恐れおののいているのだ。愛たちのような敵の中で、彼女(寂靜)は、どのような(存在の)可能性を持っているというのだ。というのは、

造化主(梵天(ブラフマー))は世界の創造にのみうつつをぬかし、ダクシャの祭式を破壊した(シヴァ)神もガウリー(シヴァ神の妃パールヴァティーの別称)の腕に抱かれて喜びで目をまわし、悪魔ダイティヤのかたき(ヴィシュヌ神)はカマラー(ヴィシュヌ神の妃のラクシュミー)の頬に描かれたマカリー(愛の旗標である雌のマカラ海獣)の印を⑫(自分の)胸につけて、大海で寝ている。だから、寂靜と対立する人々は何の問題ともならない。(28)

〔人間に向かって話す〕おろか者よ！行け！私の命令を愛に急いで行って告げよ！（迷妄からの手紙）『正しい法は悪意を持っているということを私たちは知った。だから、この者（正しい法）を、少しも信用すべきではない。しっかり、縛って捕まえておくべきである。』ということ。

* 人間 王様の御命令どおりにいたします。

〔（人間が）退場する〕

強大なる迷妄 〔思案ののちひとりごとをいう〕寂靜に対して如何なる方策をとろうか？しかし、他の方策は必要ない。この件に関しては怒りと貪欲の二人で十分間に合う。〔大声で〕おい！そこにいるのは誰だ！

門衛 〔登場する〕王様、御命令を！

強大なる迷妄 すぐに怒りと貪欲を呼べ！

門衛 王様の御命令どおりにいたします。

〔といて退場する〕

〔それから、怒りと貪欲が登場する〕

怒り 私は、寂靜と信仰とヴィシュヌ神への信愛たちが、大王様に対して敵意をもって行動しているということを聞きました。ああ！私が生きているうちは、これら女たち自身（の安全）を氣遣うことなしに、どのように行動するのでしょうか？というのは、

私は世界を盲目にし、聲にする。私は絶えず知的なものを無知なるものへと導いている。だから（人々は）もはや行動すべきことを見きわめることもなく、良き忠告にも耳を貸そうとしない。尊者も、学んだことをもはや思い出すことはない。（29）

貪欲 ああ！私によって捕えられたものたちは、繰り返し寄せる欲望の河をもはや渡りきることはないのだ！彼らは寂靜たちのことをどのように考えているのだろうか？見ろ！見ろ友を！『これらは、俺の象であり、その象の額からはマダ（発情した時、発する mada 漿液）の液を分泌し、駿馬は風の如く突っ走る』『俺は他のものまで自分のものにするつもりである』『俺はこれを得た』『俺はこれを得る』といて、これを得てもまたより多くのことを人は考えるであろう。ああ！不安で悩まされた心の持ち主たちには、寂靜のことなど問題にはしない。（30）

怒り 友よ！あなたは私の力を知っておられる。

神々の王（インドラ）は、トヴァシュトリ（tvāṣṭr）の息子、ヴリトラ（vṛtra）を殺した。三日月を額に頂く神（シヴァ）は梵天の首を切った。カウシカ（kauśika すなわちヴィシュヴァーミトラ viśvāmitra）（彼と、メーナカの子がシャクンタラーである）は、ヴァシシタ（vaśiṣṭha）の息子たちを虐殺した。

そのほかに、

学識があり、名高く、善行によって純粹で気高く勇ましい家族のものたちさえも（私は）根絶することができる。（31）

貪欲 渴愛よ！ここに来なさい！

〔（貪欲の妻、渴愛が）登場〕

* **渴愛** 御主人様は何をお命じなさるのですか。

貪欲 愛する妻よ！聞きなさい。

田畑、村、森、山、町、都市、大陸、全大地の（獲得の）願いという長い綱によって縛られた心の持ち主は、より多く獲得することを考えるであろう。渴愛よ！女神よ！もし、あなたが（私に）好意をもっておられるのなら、もし、あなたが彼らの中で成長するのなら、ああ！十万の宇宙⑬を得ても人間どもにとって、どこに、安らぎを得ることができるのか。（32）

* **渴愛** だんなさま！私自身としましては、私は常にこのことに携わってまいりました。しかし今、だんなさまのご命令によって、一万の宇宙さえも私の腹を満たしていないのでしょうか。

怒り 暴力よ！ここに来い！

〔（怒りの妻、暴力が）登場〕

* **暴力** ここにおります。だんなさま、お命じください。

怒り 愛する妻よ！正式な妻としておまえと一緒になら、父母を殺すことさえも、私にとっては、容易なことなのだ、というのは、

悪魔の母は誰か？父は誰か？誰が兄弟で虫けらなのか。この家族の者は死に値する。これら近親者たちは、狡猾で、厄介者の友人のように振舞う。

〔両手をこすって〕

私が胎児に至るまでこのものたちのこの一家を完全に亡ぼさない限り、怒りの炎の輝ける火花は（私の）身体の中で止むことはない。（33）

〔見まわして〕

ここに御主人様がおられる。近くに参りましょう。〔全員が近づく〕勝利！王に勝利あれ！

強大なる迷妄 信仰の娘、寂靜は、我々の敵である。彼女（寂靜）は、あなたたちによって確（し）かと捕らえておかねばならぬ。

一同 あなた様の御命令どおりに。

〔一同退場〕

強大なる迷妄 『信仰の娘』と言ったことから、別の方策が心に思い浮んだぞ。

そうだ、寂靜の母は信仰なのだ。そして、彼女（寂靜）は決して（母と）離れることはない。だから、どのような方法をとってもウパニシャッドの側から寂靜を（わが軍の方へ）引き入れなければならない。あのあまりにも優しい寂靜は母との離別という苦しみから死んでしまうだろう。娼婦である邪見（mithyādr̥ṣṭi）こそが、信仰を浚（さら）うことができる。結局、このことに関しては、実に彼女（邪見）に任さなければならない。〔まわりを見渡して〕錯誤（vibhramāvatī）！すぐに娼婦の邪見を呼べ！

* **錯誤** 王様の御命令どおりに。

〔錯誤が退場し、邪見とともに登場〕

* **邪見** あのね！（原文では sahi 友よ！ が用いられている）大王様には久しくおめにかかっておりませんので、どのように、お顔を拝見すればよいのでしょうか。大王様はさぞ私を叱っておられることでしょうね。

* **錯誤** あのね！あなたがおめにかかれれば、大王様は我を忘れんばかりの思いでしょうよ。どうしてあなたを叱っておられるのでしょうか。

* **邪見** あのね！じゃ、なぜ、あなたは、私を偽りの幸せとみなしてあざけり笑うの？

* **錯誤** あのね！今日も、（あなたのいう）幸せの中には、偽りがあるように私には思えますの。その上、私の最も愛している友（邪見）は眠むような目⑭をしているように私には見えますわ。私の愛する友（あなた、邪見）が眠らなかった原因は、何だったの？

* **邪見** あのね！ただ一人の恋人しかもたない女性もいるでしょう。実は、彼

女にとってそれでは十分に眠れないのよ。だから、私のいいたいことは、(私の恋人は) 皆だということなの。

- * **錯誤** じゃ、誰と誰が、私の愛する友(あなた)の恋人なの？
- * **邪見** あのね！最初は、大王様。それから愛と怒りと貪欲と自我意識。これだけ数え上げれば十分でしょ。この一族の中で、子供や年寄りや若者みんなの心の中に私がいないと、昼となく夜となく、彼らは楽しめないのよ。
- * **錯誤** しかし、愛には快樂(rati)が、怒りには暴力が、貪欲には渴愛が、本当に愛する妻だと私は聞いているよ。いつも彼女たちの愛する夫たちとベッドをともにしてどうして、あなたは、嫉妬しないの。
- * **邪見** あのね！嫉妬なんて、あなたは、どうして言うの。彼女たちでさえ、私がいなければ、一瞬たりとも満足できないのよ。
- * **錯誤** あのね！だからこの世には、あなたの幸せを待つ女性が一人もいないと言っているのよ。というのは、愛されるという幸せの大きさを知らない心をもつ彼女(あなた・邪見)の恋がたきたちは寵愛を追い求めるのよ。あのね！ほかに言うことがあるのよ。愛する友よ！このように、眠むたそうな目をしておぼつかない足取りで歩けば、足の飾りがそうぞうしい音をたてて、大王様に挨拶なさったときに疑惑をいだかせないかと心配しておりますのよ。愛する友よ！
- * **邪見** 何が疑われるの。私にとってこの不謹慎こそが大王様の御命令ではなかったのかしら。それから、あのね！ちらっと見ただけで(怒りが)癒される人々の前では、どのような恐怖があるというの。

強大なる迷妄 〔見まわして〕ああ、愛する邪見がここに来ている。

大きく重い臀にてよたよた歩み、少しずれた花冠をもとにもどすとき、大きく上げた腕から見られる乳房に爪⑮のあと。青き蓮花の花飾の如き切れ長の目で見られれば人の心は彼女のとりこ。手を振り鳴らし腕環から大きな音をたてながら、彼女が来る。(34)

- * **錯誤** ここに大王様がおられます。愛する友よ！もっと近くに来なさい。
- * **邪見** 〔近づく〕勝利よ！大王様に勝利あれ！

強大なる迷妄 かわいいやつだ！

引っかけた爪あとのある乳房を見せて抱いておくれ、大きな太腿で私の

膝の上にお座り。鹿の如き目を持てる者よ！シャンカラ（シヴァ神）のひざの上に座ったヒマラヤの娘（パールヴァティ）の豊かな優しさをまねてごらん。(35)

* 邪見 〔笑みをたたえて、そのようにする〕

強大なる迷妄 〔抱擁の喜びを示すしぐさ〕ああ！愛する者に抱かれていると、新たに若さを取戻すのだ。というのは、

若い頃の新鮮な魅力に対する動揺によって生じる心の苦痛は、対象をはなれた歓喜で満ちているものであった。しかし、あなたの抱擁によって生じるものは、他の反応を、おおいにかくし新たな愛の如く、再び私は愛の衝動を持った。(36)

* 邪見 大王様！私も今、若さを取戻しました。心に生じた愛は、時がたっても決して消えることはないのです。王様、御命じください！なぜ王様は私を思い出されたのですか？

強大なる迷妄 愛する者よ！

ああ、美しい太腿をもつ女よ！心の外にあるものこそが思い出される。しかし、あなたは、私の心の壁に描かれた彫像のように輝くのだ。(37)

* 邪見 なんとすばらしいことでしょう。

強大なる迷妄 あたかも肌をあらわにし、至る所をあなたが歩き回るとく行動すべきである。また他に、奴隷の娘、信仰は分別とウパニシャッドと一緒に和合させるために、仲人を引き受けている。だから、

我々の敵であり、育ちの悪い女であり、罪深き女であり、悪の追隨者であるみだらな女の髪を捕んで、娼婦の館へつれて行け！（38）

* 邪見 たとえこのようなことにおいても、王様は心配なされなくともけっこうです。ほんの言葉をかわすだけで、王様の奴隷、信仰^⑩は、すべて意のままになるでしょう。実に、私が、彼女に『正しい法は、偽りであり、解脱は偽りであり、ヴェーダの道は偽りであり、至福への障害をなすもの

は偽りであり、聖典の教えることは偽りであり、天界の果報は偽りである』
とってだますなら、すぐに彼女は、ヴェーダの道はずれるでしょう。
ウパニシャッドがどうだというのは。さらにまた、解脱は感覚的喜びと
異なるという理由から欠陥を示すなら、すぐに信仰をウパニシャッドより
私は離すでしょう。

強大なる迷妄 もしそうなら、私のために愛するものが、愛するものによっ
て恩恵を施すということになる。

〔再び抱擁し、口づけする〕

* **邪見** 公然と、そのように王様が振舞われますと、私は恥かしくなってし
まいますわ。

強大なる迷妄 それでよい。私の館に参ろう。〔一同退場〕

——強大なる迷妄の主要な仲間と名づけられた第二幕——
終

劇中〔 〕はト書きを示し、()には筆者の注釈及び補遺を書き入れた。
詩節の訳に際して、原文では音調等をふまえて書かれているが、筆者の能力
では、とうてい訳出することが不可能である。文意を重視したため、翻訳自
体が説明的になり冗長になったことをお許し願いたい。行末のカッコに入っ
た数字は、原文の詩節の番号に符合する。登場人物は、抽象的概念が非常に
多いので、ゴチック体で示すことにした。訳にあたり上村勝彦氏の『インド
神話』東京書籍、『インドの詩人』春秋社の両著書を多いに参考にさせてい
ただいた。

prabodhacandrodaya は S.K.Nambiar 女史と A.Pédraglio 氏により画期的研究
がなされている。A.Pédraglio 氏は歴史上人物としての kīrtivarman と karna
の名より劇中の viveka と mahāmoha の戦闘を chandella 朝の王 kīrtivarman と、
kalacuri 朝の王 Karna の戦闘に設定し、kirtivarman の勝利を称え、1060～70
年に chandella 朝の首都 kalanjara でこの劇が上演されたとする。

註

- ①『偽善（欺瞞）、尊大、高慢、怒り（krodha）、粗暴、無知。以上は阿修羅的な資質に生ま
れたものに属する。アルジュナよ。』と『バガバッド・ギーター』16章4に述べられて
いる。

- ② vārāṇasī は、現在のベナレスであり最も聖なる地とされている。昔、ガンジス河とゴマティー河の合流地であった。またヴァラナー川とアシー川という小さな川の名よりこの名がつけられたともいわれる。
- ③ ブラバーカラは、クマーリラの師であると見なされる。
- ④ ブラバーカラの註釈家、Śalikanāthamīśra
- ⑤ Mahodadhi はシャリーカナータミシュラと同時代の人で、ブラバーカラの弟子であった。
- ⑥ Mahāvratā はマホーダディと同時代の人で、クマーリラ学派に属する。cf. T.R.Chintamani, "Mahodadhi and Mahāvratā, Two old Mīmāṃsāśāstras", *Journal of Oriental Research*, Madras, II, Part I, January 1928, pp.62-64
- ⑦ 現在のフグリ地方の Bhūriūt, Bhr̥ṣṭ, Bhursuṭ であろう。Prabodh Chandra Sen, *Some Janapadas of Ancient Rājasthān*, VIII, No.3, September 1932, pp.521-534. は、Bhūrisṛṣṭi と同じで *Nyāyakandālī* の著者 Śrīdhara の如く学識を自負する偉大な学者たちの生誕地であった為にクリシュナミシュラが、この地を自我意識の故国としたと述べる。
- ⑧ ブラバーシャカは脇役たちの間で演じられる序幕である。この戯曲においては、ブラークリット語ではなく、サンスクリット語で会話がなされる。
- ⑨ マーダヴァの『全哲学綱要』の Ānanda Āśrama Sanskrit Series, 51, Poona, 1906 の p.5 に全く同様の頌が見られる。
- ⑩ オリッサ地方の別名。
- ⑪ プリーのジャガンナータ寺院。
- ⑫ 雌の海獣の刺青、雄の海獣 (makara) は、カーマ愛神の旗標である。
- ⑬ 全宇宙を意味し、梵天はこの宇宙卵を割って天地を創造した。
- ⑭ 夜中愛しあって、不眠の快樂のために瞳がぐるぐる廻っている。
- ⑮ 性的興奮が高まると、恋人の身体に爪あとをつける。『カーマ・スートラ』2.4
- ⑯ バガヴァッド・ギター、17章 2-4 に、三種の信仰が述べられている。『聖バガヴァッド』は告げた。人間の信仰は三種である。それは各自の本性から生ずる。すなわち、純質的 (sattvikī)、激質的 (rajasī)、暗質的 (tamasī) な信仰である。それらについて聞け。(2) アルジュナよ、すべての者の信仰はその心性に対応する。人間というものは信仰よりなる。ある人がある信仰を抱く場合、彼はその〔その信仰に対応する〕者に他ならない。(3) 純質的な人々は神々を供養し、激質的な人々は夜叉や羅刹を供養する。他の暗質的な人々は、餓鬼や鬼霊の群を供養する。(4)』上村勝彦『バガヴァッドギター』岩波文庫
- 第三幕より信仰が激質的、暗質的になることを暗示している。

底本・参考文献

Dr. Sita Krishna Nambiar, *PRABODHACANDRODAYA OF Kṛṣṇa mīśra (Sanskrit Text with English Translation, a critical introduction and Index)*, Delhi: MOTILAL BANARSIDASS, 1971

Armelle PÉDRAGLIO, *UN DRAME ALLÉGORIQUE SANSKRIT Le Prabodhacandrodaya de Kṛṣṇamīśra*, Paris: Institut de Civilisation Indienne, 1974

